



本書の最大の価値は 情報提供の最善手がわかること

評者 | 小西竜太 エム・シー・ヘルスケアホールディングス株式会社上席執行役員 CSO/
CMO/ 元・関東労災病院救急総合診療科部長

本書のケア移行をすべての医療・介護従事者が心がけたら、この国の健康寿命、患者さんの QOL や幸福度、そして医療・介護従事者のやりがい、すべてが向上するに違いない。

本書には医療・介護現場におけるケア移行という観点で、望ましい情報コミュニケーションの実践知が詰め込まれている。特に素晴らしいのは、相手を思いやる精神論や顔の見える関係づくり、コミュニケーションテクニックを披露するものではなく、あくまでも「ケア移行に必要な情報整理」に絞って解説している点である。さらには、多様な現場やケアプロセスにおけるアセスメントツールも紹介されており、情報の精度をさらに高めることができるだろう。

一方で私が圧倒されたのは、ケア移行に関する情報の質と量であり、退院時診療情報提供書・主治医意見書・入院時診療録・入院指示簿などの参考例が示されている。多くの患者を抱えて病状説明や外来に追われている医師には、ここまで仕上げる時間的余裕はなく、私も正直なところ、ここまでは書けない！ それでも、何とかエッセンスを取り入れてベストな情報に近づけられるように頑張りたい。というのも、診断や治療のスゴ腕には出会えても、情報提供のスゴ腕というのは見たことがない。そういう意味では、最善手の情報を知ることが、この本の最大の価値と感じた。

本書は、総合診療に従事する医療者だけでなく、地域連携を実践しているすべての医療・介護従事者が対象となる。情報を発信する側だけでなく、情報の受け手側にとっても、「質問力」「フィードバック力」「確認力」を向上させられるはずだ。もしも、地域の関係者たちが本書の輪読会をする機会があれば、必要な情報を整理して、より効率的な情報共有の仕組みができるかもしれない。

日本の医療・介護システムを俯瞰すると、強固な既得権益を保持する業界が変わらない限り、運営母体が多様な地域包括ケアの仕組みでは、この 10~20 年の間に満足なケア移行が実施できるような情報デジタル連携や AI 化は起こらないと断言できる。たとえ SNS やメールなどデジタル媒体を活用したとしても、処方歴や検査・画像情報以外の情報においてはアナログ的な範囲を超えられないだろう。つまり、われわれは自ら診療情報を書き続けるしかない！

時代とともに医療技術は進化していくが、われわれがつくる診療情報も同じく進化する必要がある、まさにケア移行の領域はその“一丁目一番地”と言えるだろう。特に「Patient Journey」に寄り添った情報は、進化の糸口になるはずだ。そして、最も進化すべき点はケア移行の当事者、つまりすべての医療・介護従事者たちが当たり前、負担と思わず、本書で紹介されている質の情報をキャッチボールすることであり、そうした情報文化を醸成することがゴールなのかもしれない。いずれにせよ、地道な実践あるのみであり、その情報整理の基準点が『外来・病棟・地域をつなぐケア移行実践ガイド』になるだろう。⑥



外来・病棟・地域をつなぐ ケア移行実践ガイド

小坂鎮太郎、松村真司＝編

定価：3,850 円(本体 3,500 円＋税 10%)
B5 判・184 頁／医学書院／2022
[ISBN 978-4-260-04885-9]